



目次

学会賞受賞特集：2012年日本火災学会賞 大宮教授.....	P 2
学会賞受賞特集：2013年日本建築学会賞(論文) 永野教授.....	P 3
※ 2012年度就職内定先	
助教紹介：水野助教・佐藤助教.....	P 4
OBと語る会レポート.....	P 5
メルマガ担当の紹介	
2012年度卒業設計各賞の紹介.....	P 6
2012年度NAA賞受賞者の紹介	
工学部建築学科50周年事業レポート5月18日(土).....	P 8
懐かしの学生寮を訪ねて～坂巻荘	
まちづくり訪問記その1.....	P 9
UNGA BOOK(設計作品集)の刊行について 岩岡教授.....	P 10
NAAからのお知らせ	
編集後記	

野田建築会会報 2013 秋号

NAA NEWSLETTER 13 AUTUMN

VOL.30



学会賞受賞特集：2012年日本火災学会賞

理科大での10年「文部科学省 COE プログラムを終えて」

東京理科大学工学部建築学科教授 大宮 喜文

—略歴—

1967年 東京都生まれ
1996年 東京理科大学大学院理工学研究科建築学専攻博士後期課程修了
(博士(工学))
1996年 東京理科大学工学部建築学科助手
1998年 建設省建築研究所研究員・主任研究員
2001年 独立行政法人建築研究所主任研究員
2007年 英国キングストン大学ロンドン火災爆発研究センター客員教授
2008年 英国アルスター大学火災安全工学技術研究所客員教授
現在、東京理科大学工学部建築学科教授

時が経つのは早いもので、建研（旧建設省（国土交通省）建築研究所）から理科大に移って、丸10年になる。建研勤務時代には、建築基準法が約半世紀前の制定以来の大改正の時機にあたり、職場は活気（殺気？）に満ちあふれていた。東京・霞ヶ関界隈の会議室で国土交通省建築指導課の面々と深夜12時位まで基準の改正内容の打ち合わせを行い、翌日の午前10時再開の会議（すなわち会議終了後10時間後の会議）までに前夜に出された宿題の回答を資料として提出するといった具合であった。

そのような時期を経て、理科大に奉職することになった。落ち着いて、じっくり腰を据えて教育・研究に邁進できればと考えていた。理科大に移ると、当時、文部科学省の最重点プロジェクトであった「21世紀COEプログラム」(COE: Center of Excellent) に若松孝旺教授（現名誉教授）が建築火災安全工学に関するプログラム「先導的建築火災安全工学研究の推進拠点」を理科大内で推薦を受け申請し、採択された。旧帝大をはじめ、日本有数の大学から建築分野に関わるテーマが申請されていたが、建築分野で採択されたのは8テーマくらいであった。結果的に建築分野以外の他の理科大学の工学系、理学系、薬学系などが申請したテーマは採択されなかった。理科大唯一の採択されたテーマということもあり、理科大の理事会や学長室のメンバーの祝福を受けた。

一方で、文部科学省から受ける破格の予算規模に見合った活動をする必要があった。そもそも、COEプロジェクトの趣旨は、簡単に言うと、専門学問領域の中で日本一の大学になることは当たり前で、世界でNO.1を目指せ、というプロジェクトであった。プロジェクトリーダーである若松先生のもと、建築火災安全工学の海外の有力大学、研究機関に頻繁に出向き、国内外で、理科大主催のシンポジウムを開催した。

小生も、国内で実施した国際シンポジウムや英国・ロンドンで開催した国際セミナーの実行委員長を務めた。建研時代にも、国際会議などに出席する機会は恵まれていたが、COE活動のおかげで、世界各国の大御所に接する機会を多く持つことができた。「21世紀COEプログラムの活動が予定通り5年間で終了した年に、その後継プロジェクトである「グローバルCOEプログラム」に、菅原進一教授をプロジェクトリーダーとし「先導的建築火災安全工学の東アジア教育研究拠点」のプログラム名で申請し、21世紀COEプログラム以上の厳しい審査を経て、幸運にも採択された。

結果的に、更に5年間、文部科学省からグローバルCOEプログラムの活動予算を頂いた。これら2つのCOEプログラムのおかげで、研究環境も整備された。お分かりの通り、理科大に移って10年になるが、常にCOEプログラムの活動を行っていたことになる。その間、理科大内に新大学院である国際火災科学研究科の創設に立ち会うこともでき、小生もその新研究科の併任教授になり、講義や学生指導のために神楽坂キャンパスに出向いている。

10年間のCOEプログラムの活動は、教育・研究基盤のスケールを大きく飛躍させてくれたことに間違いはなく、教育・研究の今後の方向性についても一定の見識を与えてくれたと感じている。COEプログラムの活動のために、研究室の学生と様々なことにチャレンジし、思うようにいかないこともあったが、学生の若き後押しされ、前向きに進むことができた。

最後に。

学生達とともに教育そして研究に奮闘した瞬間の10年であったが、昨年、学生達と行ってきた研究成果が認められ、「建築物における延焼拡大およびその防止に関する一連の研究」に対し、日本火災学会賞を頂いた。また、今年3月に本学大学院博士後期課程を修了し大宮研究室出身第1号の博士となった後藤大輔氏（東京消防庁）が日本建築学会論文奨励賞、野秋政希氏（大宮研究室博士後期課程1年）が日本火災学会学生奨励論文賞を授与された。これまでも、大宮研究室の学生が表彰などされる度に、とても幸せな気持ちになる。今後も、学生と夢を見ながら、多くの感動に出会えればと思っている。



学会賞受賞特集：2013年日本建築学会賞（論文）

日本建築学会賞（論文）受賞の報告

東京理科大学工学部建築学科教授 永野 正行

—略歴—

1964年 生まれ
早稲田大学卒業
同大学院修士課程修了
地震工学・耐震工学
博士（工学）
一級建築士
共著に『入門・建物と地盤との動的相互作用』、『建物と地盤の動的相互作用を考慮した応答解析と耐震設計』ほか
2000年 日本建築学会奨励賞

永野研究室は建築学科の構造系研究室として2008年にスタートしました。その前の20年間、筆者はゼネコンの耐震研究部門に属しておりました。そのゼネコン時代から現在に至るまでの成果を取りまとめた、「地震動の増幅特性と地盤・構造物の地震時挙動の解明に関する一連の研究」により、2013年度日本建築学会賞（論文）を頂くことができました。関係の皆様方には、この場を借りて御礼申し上げます。写真1は2013年度学会大会での記念講演の様子です。

本研究は、震源断層の破壊による地震波の発生から、地盤応



写真1 記念講演の様子

答、建物の動特性までの横断の評価を念頭に、15編の査読論文を構成したものであり、以下の3つのテーマから構成されます。

①地震動評価と地盤増幅評価に関わる解析技術の開発

②段差状の不整形地盤における地盤増幅メカニズムの解明

③地盤との動的相互作用を含む建物応答評価に関わる研究

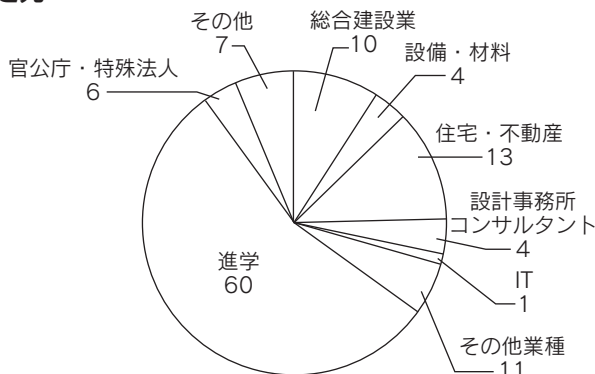
現在、永野研究室では、地震・減災に係わるさまざまな研究テーマに取り組んでおります。東日本大震災時の首都圏、大阪圏での長周期地震動、南海トラフによる地震動予測、超高層マンションの揺れと室内被害、液状化地盤の杭の損傷評価、木造軸組み架構の制震補強と性能評価など、いずれも学術的にも社会的にも重要な研究テーマです。今年は大大会に合わせ、北海道でゼミ合宿を行いました（写真2）。今後発生が予想される南海トラフでの海溝型地震や、大都市直下で発生する巨大地震に備え、減災のために私たちに何ができるか、学生たちと一緒に考えていきたいと思っております。



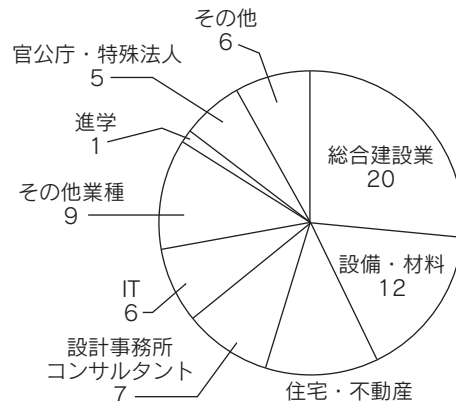
写真2 北海道でのゼミ合宿

2012年度 卒業生の就職先 など内定先

学部卒業生（109名）



大学院修了生（75名）



助教紹介



水野 貴博 (みずの たかひろ)

1974年 愛知県生まれ
1997年 東京大学工学部建築学科卒業
2001～2003年
ハンガリー政府給費留学生として
ブダペスト工科大学留学
2007年 同大学工学系研究科建築学専攻博士課程修了
2007～2008年 同大学院客員研究員
2008～2012年 跡見学園女子大学非常勤講師
2011年～

東京理科大学理工学部建築学科助教、
慶應義塾大学非常勤講師

理科大の助教に着任して早くも2年半になります。2号館の4階にもすっかり馴染み、野田キャンパス内だけでなく、街中をぶらついているときや建築見学に行った先でも、理科大の学生に声をかけられることが多くなってきました。

建築に関する漠然とした興味は幼いころからありましたが、東京大学に入学したときには、文学部系の学科に進学したいと考えていました。少し大げさに言えば、人間の多様な文化や創造性の一端を解き明かしたいという思いからだったのですが、そこで改めて、人類にとって最も根源的な存在でありながら最先端のテーマでもある建築という分野の魅力に気づきました。傍系進学で建築を専攻したのですが、哲学から災害対策まで幅広い領域にまたがる建築学科での勉強は、他ではなかなかできない経験だったと思います。

今でも学科の先生方や助教の皆さんと話すたびに、異なる角度からの建築の捉え方に刺激を受けていますが、こうした刺激を私の専門である建築史を通して学生さんたちに与えていくことが私の役割だと考えています。歴史研究というアプローチは現実には目の前にある問題を解くためには遠回りにも見えますし、高校時代歴史や古文は苦手だったと言ってちょっと尻込みする学生もいますが、眼に見える建物や集落のもつ奥行きを理解し、それを設計やまちづくりに生かしてほしいと願っています。

一方で、理科大で学生たちとの共同作業を通して私自身も貴重な体験をしています。建築史の研究は、方法によっては文献さえ手に入れば一人の作業で研究が完結させることもできるのですが、学生と共に民家の天井裏で煤まみれになって実測をしたり、子供たちとのワークショップで不慣れな手つきで鑿でほぞ穴を刻んだりするのも、学生時代以来の楽しい経験です。

助教になる前から野田キャンパスには定期的に来ていました。そのため、特に川向研究室のOBとはかなり前の世代まで交流があり、現在では皆さん第一線で活躍しています。第二の母校ともなった理科大で、残りの任期を精一杯勤め上げたいと考えております。どうぞよろしくお願いたします。



佐藤 利昭 (さとう としあき)

1982年 神奈川県横浜市生まれ
2005年 東京理科大学・理工学部卒業
2007年 同大学院・理工学研究科・修士課程修了
2007年～2010年 MASA 建築構造設計室・技術主任
2009年～2012年
東京大学大学院・工学系研究科博士課程・博士(工学)
2010年～2012年 日本学術振興会・特別研究員(DC)
2012年～2013年 東京理科大学・PD研究員
2013年～ 東京理科大学・北村研究室 助教(現職)

この自己紹介をOB・OGの皆様がご覧になることを考えると、本学の卒業生である私は、同期生や知人の先輩・後輩の目をつけ意識してしまいます。当時を振り返ると、建築学科に入学して風変わりな友人・知人に囲まれ、それとなく意匠設計に面白みを感じていた頃から、約10年の月日が経ちます。私を知る人がいれば、現在、耐震工学を専門とし、大学に勤めていることに驚く人も少なくない気がします。

研究職を志望したきっかけは、間違いなく2号館4Fの廊下で「井口研究室」と書かれたA4用紙に記名したことで、幼少より憧れた職業などといった立派な理由はなく、自分のわがままを押し通した結果であるように思います。師事した井口先生からは多くを学びましたが、その中でも研究の楽しみ方を教わったことには、心から感謝しています。修士課程修了後、共同研究先であった構造設計事務所に勤めることになり、数年間の設計実務を経験しながら博士課程の学費を蓄え、研究活動自体は、現在までの約10年間途絶えることなく続けられています。

自身の専門は、耐震工学、特に木質構造の耐震安全性についてで、中でも木材が天然材料であるが故に持っている様々な性質に興味を持っています。具体的な建築分野としての課題を挙げると、木造制振住宅、木質ラーメン構造、社寺建築の耐震安全性などを検討しています。最近の研究活動では、北村研らしい研究にも携わっていますが、まだまだ学ぶべきことも多いと切に感じています。

OB・OGの皆様には、研究活動などでお世話になる機会もあるかと思うので、野田キャンパスにお越しの際には、気軽に研究室までお立ち寄りください。

メルマガ担当者紹介

毎年、各研究室から4年生・M1・M2の3人の学生幹事が選出されます。今年度も彼らを中心に年2回の「OBと語る会」の準備が行われ、2回/月のメールニュースが発行されています。

メールニュースは毎月各研究室が月代わりで作成することになりましたので、3人の学生幹事にはそれぞれのトピックを考えてもらいます。またOBからの寄稿も月1回のペースで掲載されています。

これは寄稿数に制限がある訳ではありませんので、これからもOBの皆さんからの寄稿を歓迎します。
(文責:高安重一 1989年卒)



OB と語る会レポート 7月1日(月)

去る7月1日(月)に、2013年度第1回目となるOBと語る会が実施されました。

今回は、2名のOBの方を講師にお招きし、社会でのご活動の内容や、就職を控えた学生へのメッセージなどをお話いただきました。

はじめに、ビューローベリタスジャパン株式会社 代表取締役社長、兼ビューローベリタス 日本支社代表 の佐々木泰介様よりお話を頂きました。

自己紹介ののち、お仕事の内容をご紹介いただきました。ビューローベリタス社は、品質、健康・安全、環境及び社会的責任分野における適合性評価を行う第三者民間検査・認証機関であり、各種検査、試験、審査、認証などを行っています。そう何うと、一見、建築とは縁が無いように見えますが、日本国内での事業の大部分は建築関係とのことでした。

具体的には、建築物等の適合性評価・監査、確認検査、構造計算適合性判断、住宅性能評価、技術監査など建築分野の中でも、業務の範囲は多岐に亘ります。

聴講していた学生たちにとって、普段の大学生活では、こうした活躍の場があることを知るは少なく、多くの学生にとって新鮮だったようです。

大成建設の信達靖様からは、自らのご経験などをもとに、社会に出た際の心構えなどについてメッセージを頂きました。一つは、進路選択についてでした。

進路の選択にあたっては、色々な選択肢があることを十分に認識する必要があること、進路先を選ぶ際には、しっかりと現



佐々木様のお話の様子

場の状況を調べることの重要性をお話頂きました。そのためには、インターンシップやOBとの連携などにより、事前にそ

の会社の状況をしっかり理解しておくことが重要であるとお願いいただきました。

二つ目には、コミュニケーションの重要性についてお話いただきました。新入社員の現場の研修で、技術系と文系の新入社員に同内容の研修をさせると、文系卒の社員の方がより多くのことを身につけることがあるとの話を例に、その違いを生むのはコミュニケーション能力であることをお話いただきました。そのうえでコミュニケーションには、思いやりが大切であり、相手の話を聞くこと(聞く能力)が重要であることをお話いただきました。



信達様のお話の様子

また、当日OBとして本会に参加いただいた佐藤総合計画の笠井隆司様からも、簡単にお話を頂きました。特に、設計の仕事为例に、設計事務所やゼネコンの設計など、組織によって関わる仕事の範囲などが異なることなどについてご紹介いただきました。(文責:小林謙介 東京理科大学理工学部建築学科助教)



OB と語る会の様子

次回 OB と語る会のお知らせ :

「同窓生リクルーターによる『就職ガイダンス』開催予定について」

新たな活動として、昨年12月に現役生の就職活動と同窓生リクルーターの採用活動を支援する、標記のOBと語る会を開催しましたところ好評につき、本年も引き続き12月上旬に開催を予定しています。

皆様のご協力並びにご支援をお願い致します。

メルマガ	研究室名	メルマガ	研究室名	メルマガ	研究室名
4月	伊藤研	8月	兼松研	12月	永野研
5月	井上研	9月	川向研	1月	初見研
6月	岩岡研	10月	北村研	2月	安原研
7月	大宮研	11月	衣笠研	3月	吉澤研

2012年度卒業設計各賞の紹介

卒業設計発表講評会は2月9日(土)、午後1時30分より行われました。

事前の採点結果に基づいた13作品の発表に対し、計画・意匠・歴史系5名の教員と非常勤講師16名、ゲストクリエイター1名(堀井義博氏:株式会社AL建築設計事務所)により講評と投票が行われ、最優秀作品1点、優秀作品3点が決定されました。

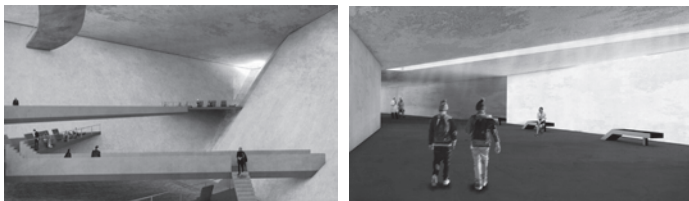
最優秀賞「landscape」

佐脇 礼二郎(初見研)



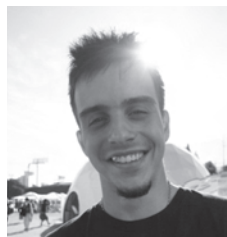
現代においてセントラルパークを一からつくることはできるだろうか。東京都は現在気候変動に伴う大雨の増加に対応するため調整池をつくっていく計画がある。卒制では、調整池という超巨大地下空間を利用し人々が散歩し、くつろげるような公園空間を、内水氾濫が起きやすく、既に巨大な地下連絡網が広がっている溜池山王、六本木、赤坂などの港区の一体に設計した。これは土木的建築物ではなく、建築的土木物である。内部、外部などという枠組みでは分類できないような、もはや環境と言ってしまってもいいような空間が広がっている。

突飛な案であったため、共感を得にくいだろうと思っていたのですが、このように評価して頂き非常に嬉しく思います。この場を借りて、サポートしてもらった後輩、先輩方々、また最高の同期たちに感謝を申し上げさせていただきます。



優秀賞「URBAN CAVE」

ジェレフ アタナス ジフコフ(川向研)

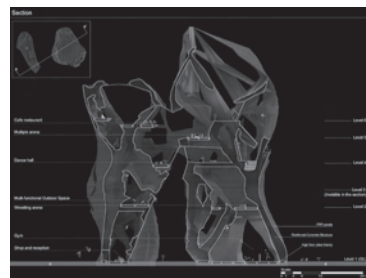


2012年度理工学部建築学科の卒業設計において2位という成績をいただいたことに大変感謝しています。私は、最新の構造解析ツールINSPIREがいかに新しい空間体験やもっと豊かな風景を生み出せるかを試してみました。

INSPIREは2009年にリリースされたもので、人間の骨の作られ方のアルゴリズムに基づいて最適な構造体を計算できるものです。こうしたツールは一般的に経済的合理性を得るために用いられるが、私はそれを使用して、内部と外部がグラデーションのように3次元的にダイナミックに絡み合い、明確に閉じられている場所がないゆえに、雲の上を漂うような軽やかさ、不安定さを持ち、触ったり登ったりしたくなる、包み込まれるような有機的で身体的な空間を作りました。

この場を借りて指導してくれた、川向先生、廣瀬先生、水野

先生、また、今回の作品でソフトウェアを提供していただいた Altair Engineering .Inc ならびに Luca Frattari (Altair Engineering) そして、手伝ってくれた先輩方、後輩達に深く感謝を申し上げたいと思います。



優秀賞

「つなぐいえ - 縮小する集落での新しい住まい方への提案 -」

石橋 拓也(岩岡研)



作品説明

縮小する集落の規模にあった住まい方で、失われつつある人と人とのつながりを再生する手法を提案する。

福浦集落では、人口の減少により空き部屋などの使われていない空間が多数存在する。

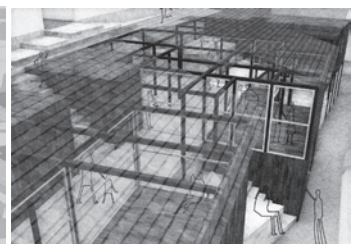
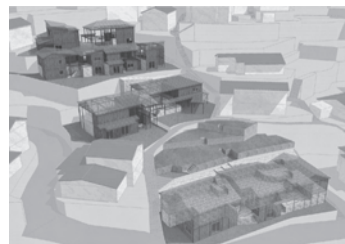
そのような空間を共有空間として解放する。共有空間を細分化すると、集落をつなぐ動線として機能する。多くの住民が共用空間を行き交い、新しいコミュニティを形成していく。

受賞コメント

卒業設計という大きな舞台で優秀賞をいただけたことを、大変光栄に思います。

考えに詰まる度に話を聞き、助言してくださった先生や先輩方、毎日のように様子を見に来てくれた後輩の皆様には本当に感謝しています。

卒業設計では考えが及ばなかった点も多くあったので、今後はより高いレベルの設計ができるよう心掛けていきたいと思っています。



優秀賞「五十年后新風景」

ハン セツキ (安原研)

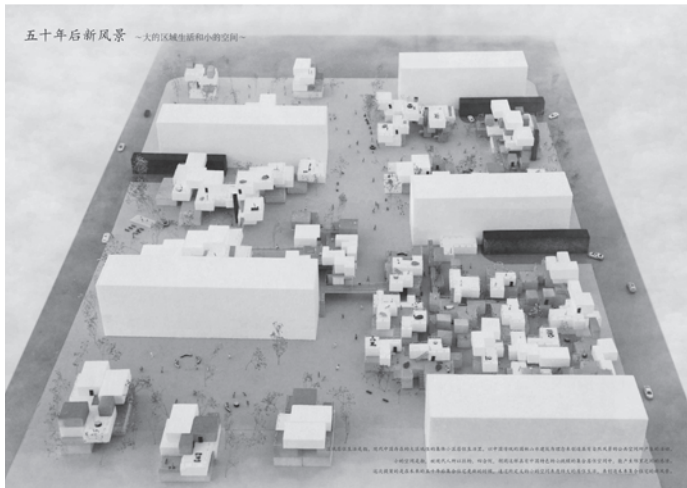


作品説明

現代中国の集合住宅、伝統園林建設の思想で作られた公園のコミュニティ、昔ながらある四合院、フートンの中の小さな単位で囲まれた中庭、住宅外壁の間に人々が集まる場所を融合する。近隣住戸同士が共有する小さなスペースから地域に広がるオーペスペースを作り、未来の集合住宅の風景を作り上げる。

受賞コメント

ご指導いただいた安原先生と研究室の先輩達に心から感謝しています。現在中国は経済成長期にあって、常に新しい物を追求していると感じています。しかし、中国の建築にとって本当に新しい物は何か、卒業設計を通して考えるようになりました。これからもそれについて考えて行きたいと思います。



2012 年度 NAA 賞受賞者の紹介

三縞 宏徳 (大宮研)

NAA 賞を受賞でき、大変嬉しく思っています。先生をはじめ、研究室のみなさんの支えがあったから、卒業論文を書き上げることができ、賞を頂くことができたと思います。卒業研究をさせて頂いている間、研究についてだけでなく、これから先の人生において大切な事を学ばせてもらい、また自分に足りなかった事に気づききっかけにもなるなど、この一年は私にとって貴重で人として成長できるものになったと感じています。

最後に一年間私を支えてくれた皆さん、本当にありがとうございました。



松永 美咲 (大宮研)

学生生活の最後に素敵な賞をいただけたことを、大変嬉しく思っております。本研究により得られた結果が、火災安全設計の発展に少しでも資すれば幸いです。

楽しい時間は過ぎるのが早く、特に研究室に所属してからの一年間はあっという間でした。遠回りをしましたが、たくさんの方に支えられ、卒業の日を迎えることができました。

背中を押してくださった先生、引っ張ってくれた先輩、いっしょにいてくれる同期、待っていてくれた家族に、心から感謝しています。

2012 年度 (平成 24 年度)

理工学部建築学科・理工学研究科建築学専攻 各賞受賞者

学部	卒業論文賞 (一般コース)	優	秀	岩 岡 研	北川千尋
		優	秀	川 向 研	ジェレフ・アタナス・ジフコフ
	卒業論文賞 (通年コース)	最 優	秀	永 野 研	山根義康
		最 優	秀	吉 澤 研	栗飯原恵、山田麻利代
		優	秀	兼 松 研	櫻井園子、富永知宏
		優	秀	北 村 研	渋谷政斗
		優	秀	衣 笠 研	豊田陽平
		優	秀	井 上 研	伊藤詩織、高島武大
	卒業設計賞	優	秀	大 宮 研	外山敬寛、長塚勇人
		最 優	秀	初 見 研	佐脇礼二郎
		優	秀	川 向 研	ジェレフ・アタナス・ジフコフ
		優	秀	岩 岡 研	石橋拓也
	学業優秀賞	優	秀	安 原 研	ハン・セツキ
1		位	北 村 研	石井舜	
2		位	川 向 研	小幡知哉	
大学院	学部長表彰	3	位	永 野 研	野木淑裕
		最 優 秀 作 品		初 見 研	常田悠太
		優 秀 作 品		伊 藤 研	石黒泰司
	修士研究奨励賞	優 秀 作 品		初 見 研	津川康次郎
		最 優 秀 賞		-	
		優 秀 賞		-	
		優 秀 賞		-	
共 通	NAA 賞	大 宮 研	大 宮 研	三縞宏徳、松永美咲	

工学部建築学科 50 周年事業レポート 5 月 18 日 (土)



中野滋理事長のご挨拶

5 月 18 日 (土曜日)、東京理科大学葛飾キャンパスにて「東京理科大学工学部建築学科 50 周年記念事業」が開催され、祝賀会に山崎副会長、高安情報部会長と共に参加しました。

葛飾キャンパスへは昨年の見学会以来ですが、都心の神楽坂キャンパスとのどかな野田キャンパスの中間的な雰囲気が金町という街並みとも調和している

ように感じられました。

当日の記念事業の次第です。

13:00 ~ 14:30 葛飾キャンパスツアー

14:50 ~ 15:20 築理会総会

15:30 ~ 16:30 講演会

17:00 ~ 19:00 祝賀会

祝賀会から参加させていただきましたが、集まった方々は 200 名ぐらいで盛況な祝賀会となっていました。先生方、OB、OG の老若男女が真新しい葛飾キャンパスに集う姿は、50 年の

歴史そのものようでした。

工学部建築学科の OB 会は、「築理会」ですが、歴代会長がずらりと並び、これまた 50 年の歴史を披露されておりました。中根滋理事長は理工学部電気工学部の出身です。同じ理工学部ということで、理工学部 50 周年の話など懇談させていただきました。

圧巻は、昨年退任された真鍋恒博先生による 50 周年記念誌の編纂顛末記でした。スライドでの説明では、1 ページ毎の情報量が膨大といつていいほどで、話したりない、聞き足りないという雰囲気でした。

東京物理学校から始まる東京理科大学の歴史ですが、ここから多くの卒業生が旅立ち、何らかの形で社会に参加、貢献してきている実感が、この祝賀会という窓から見えたように思いました。(文責：五十嵐洋也 1978 年卒)



築理会・歴代会長

懐かしの学生寮を訪ねて～坂巻荘

今年 3 月に突然、家電に FAX が入った。学生時代同じ下宿で生活をした友人からであった。

卒業以来、40 年近く会っていない電気工学科の大塚君 (S.52 年卒) で、同じ下宿に居た機械工学科の石井君 (S.51 年卒) が定年退職をして茨木の実家に帰るので、3 人で会おうと言うものだった。

3 月 27 日に新橋で会い、学生時代一緒に生活をした運河の下宿 (坂巻荘) を当時一緒に居た人達に声を掛けて、「坂巻荘ツアー」を計画する事になった。卒業以来バラバラになっていた、山形県の尾形君 (S.51 年数学科卒)、富山県の下君 (S.51 年経営工学科卒)、岐阜県の佐藤君 (S.51 年経営工学科卒) からも参加の連絡があった。

5 月 5 ~ 6 日の一泊二日で、6 人による理科大 - 坂巻荘 - 柏のツアーが挙行された。昼前に 2 号館 1 階のオープンスペースに集合した。

大学は 5 月連休中で学食が全て閉まっていたため、運河駅近くで昼食を取り、大学構内を散策した。筆者は 4 年前から建築学科の非常勤講師をやっており、大学の様子は良く見ていたが、他の 5 人は 38 年ぶりのキャンパスの変貌に驚いていた。

正門から 2 号館までのスペースには当時学生が車を停めていたが、現在は植栽等で見



違える程、整備されている。4 号館裏の当時砂利で土埃の中、野球をやっていた中庭は、これまた見間違え程に整備されている。図書館の向かいの講義棟の中に入ったが、38 年ぶりの

来訪者には目を見張るエスカレータがあった。2 号館と 1 号館の間の道を東に進み、突き当たりの小さな森の裏手に懐かしい坂巻荘がある。道から少し奥まった所に全 20 室の古くはなっているが、当時そのままの建物があった。残念なことに、現在は使われておらず、倉庫になっていた。

それは、坂巻の大家さんはご主人が亡くなられ、子供さんは独立して外にでておられ、おばさん一人で暮らしておられるからだ。我々の来訪に気付かれたおばさん (80 才) が母屋から出てこられ、38 年ぶりの再会となった。当時は 40 代前半で若かったおばさんも 80 才になられ、さすがにしわが目立ったが、声は当時のままであった。お茶を頂きながら、当時の思い出話に花を咲かせた。

当時、新入生が 20 人一斉に入居し、我々のお母さんの存在であったおばさんにまた、38 年ぶりにお会い出来た事に全員感激をした。また再会することを約束しておいとしました。

東武野田線で柏に行き、東口の居酒屋で語り、宿泊のホテルで 2 時まで思い出を語り合い、翌朝別れを惜しみつつ解散した。

(文責：瀬沼央 1978 年卒)

まちづくり訪問記 その1

件名：小布施町まちづくり（長野県上高井郡小布施町大字小布施 1491-2 外）
視察の目的：東京理科大学工学部（川向研究室）が関わる小布施町まちづくりの実態
視察日：2011年8月10日～11日
文責：山崎晃弘（1976年卒上原研）
NPO 法人日本景観フォーラム理事
（有）ヤマザキ建築企画設計代表取締役
同行者：NPO 法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦・照明デザイナー野村宏幸・留学生研修 net 角田善彦



発令され、歴史文化ゾーンに設定された町中心部地域「老舗栗菓子店舗等」における行政と関係住民・事業者の協働による町並み修景事業や格調ある住まいづくり・店舗づくりによる景観形成を展開しました。



散策・栗の小径

りによる景観形成を展開しました。

・1987年小布施町地域住宅計画（ホープ計画）で定めた町特有の家づくり・町並みづくり指針「環境デザイン協力基準」は、1990年「小布施町うるおいのあ

る美しいまちづくり条例」制定に繋がり、景観意識“外は皆のもの、内は自分たちのもの”が共有化されます。

- ・2004年景観法制定により全国的にまちづくりが推進されるなか、2005年に東京理科大学と協働で設立した「小布施町まちづくり研究所」等“まちづくり第2ステージ”を始動し、2006年に小布施町は景観行政団体となり、このとき景観法に基づき前述の条例を全面改正して、景観計画の策定をはじめ建築等に関する届出制や各種助成金を設けるほか、屋外広告物条例を制定しました。



古民家・平松家住宅

<次回予告>小布施町でのまちづくり事業について、今日までの経緯と実績です。

（文責：山崎晃弘 1976年卒）

1. 小布施町とは

まず、町の成立ちははじめ概要から説明します。

- ・位置：長野県東北部長野盆地（善光平）面積：19k㎡
人口約11,500人
- ・旧石器時代（約1万年前）から始まり、鎌倉時代の史料にその地名が表われ、千曲川の舟運が発達した江戸時代には北信濃の経済や文化の要衝となり、葛飾北斎や小林一茶ら多くの文人墨客が訪れたといえます。
- ・明治になり県下有数の養蚕地帯として栄え、明治22年町村制により小布施村・福原村・大島村・飯田村・山王島・北岡村・押羽村が小布施村として併合し、昭和29年町村合併促進法により小布施町となり、さらに都住村（都住村・中松村・雁田村）合併した、現在の小布施町が誕生しました。
- ・先覚の文化遺産を継承した「北斎と栗の町」として全国的に注目され、近年では長野で一番小さな町「北斎と栗と花の町」という新たなコンセプトを掲げ、年間来訪者数は約120万人にのぼるそうです。

2. まちづくりへの取組について

ここでは、東京理科大学が協働した「小布施町まちづくり研究所」に注目してください。

※小布施町地域創生部門係長荒井俊博氏と主任研究員勝亦達夫氏（工学博士・川向研）に会談しました。

- ・小布施町では2004年景観法の制定前から、景観を重視したまちづくりに計画施策が積極的に実施されて、1976年浮世絵師・葛飾北斎（晩年当地を訪れ、多くの肉筆画を傑出



の作品を保存・展示する「北斎館」が開館したことから始まります。

- ・1981年第二次小布施町総合計画に、すぐれた自然環境と文化景観がほどよく調和した“小布施の格調”を維持・成長させ、住民の協力を得てまちの景観をつくりあげる「まちづくり基本構想」宣言が

UNGA BOOK（設計作品集）の刊行について

作品集編集担当：理工学部建築学科教授 岩岡竜夫

2012年度より、学部・大学院での年間の設計関連の授業内容をまとめた「設計作品集」を刊行することになりました。

この作品集では、学部1年の空間デザイン演習から大学院の修士設計までの各課題の優秀作品を掲載し、さらに課題の趣旨や作品に対する評価などを盛り込んでいます。設計課題に費やす学生らの膨大なエネルギーや、講評会での講師の先生方の熱きバトルを、なんらかの形で残しておきたいというのが、今回の発行の第一の動機です。またこの作品集が、設計系の各授業の連携に役立ち、さらに本学科の対外的な表現媒体となれば幸いです。

内容は大きく三部構成となっています。

まず「講評審査会」では、修士設計と卒業設計の講評会の様子を集約して優秀作品とともに掲載しました。つづいて「設計作品」の前半では1～3年次までの各設計課題について掲載し、さらに後半ではユニットマスター制の4年次と大学院の設計授業について掲載しました。

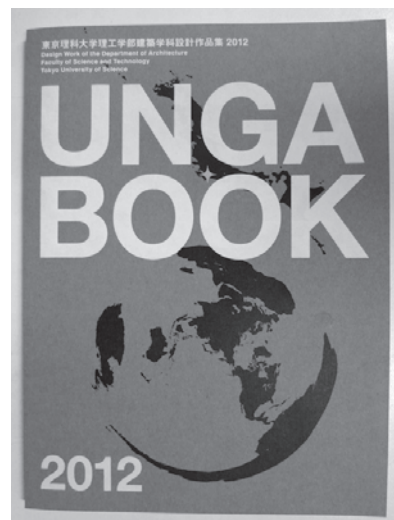
それぞれのセッションの前後に、今回の特集記事として計画意匠系の専任教員による対談等を入れました。また巻末には、各研究室の紹介とトピック、さらに現役学生によるコンペの勝敗表を掲載しました。

UNGA という通称についてですが、編集関係者から、キャンパスの最寄り駅の名称であるこの言葉の響きが良い、という意見が多かったので、そうさせていただきました。

表紙の図柄は、野田キャンパスの場所を中心とした世界地図で、裏表紙には掲載した設計作品の敷地の一覧が記載してあります。

編集と発行については、

新建築社に長年勤務し独立された学科OGの有岡三恵さんに全面的にお願いしました。今回、初めての製作で不備な点が数々あると思いますが、今後は野田建築会との連携を図ることなどにより、より一層充実した内容にできればと考えております。



NAA からのお知らせ

【定期総会のお知らせ】

来年2014年5月に野田建築会の第9回定期総会が開催されます。同窓生の皆様のご支援を賜りますようお願い致します。

【会費納入のお願い】

NAAでは会則により、2013年度（2013年4月1日～2014年3月31日）の普通会員年会費として3,000円を徴収しています。これらは会報の発行、OBと語る会の開催、見学会等の研修、NAA賞の授与、NAAサイトの維持その他NAAの活動に有効に活用されています。こうしたNAAの運営に向け、同窓生の皆様のご理解とご協力をいただき、同封の振込用紙にて会費納

入をお願い致します。

（振込用紙記入の際、卒業年は必ずご記入ください）

【NAAサイトのお知らせ】

情報交換の場としてNAAサイト

<http://www.rikadaikenchiku.com>

を設けており、大学の動向を発信するメールマガジン（NAAメルマガ）も最新動向として提供しています。登録はサイトに直接か、振込用紙のメルマガ欄の購読希望に○印をつけるかで可能となり、メルマガが届くようになります。

なお、ご意見はこちら nodakenchiku@yahoo.co.jp までお寄せください。

【編集後記】

本年から東京理科大では、理科大への恩恵を果たしたいとの思いで、理工学部電気工学科卒の中野滋・新理事長が就任され、『世界の理科大』を目指すという、光触媒で高名な藤嶋昭学長との連携で、新たな体制に入りました。

会報のなかで工学部建築学科50周年をお伝えしましたが、理工学部建築学科では50周年を2017年に迎えます。については、50周年事業に向け、各年度卒業生幹事や各研究室幹事（ともに構想中）との連絡を深めながら、さらには理工学部全体のイベントとして大学との協働を視野に、NAAで協議していきたいと考えています。その際には皆様のご協力を賜りますようお願い申し上げます。（文責：山崎晃弘 1976年卒）

野田建築会 会報 13 秋号

2013年10月1日

編集：会報部会

発行：東京理科大学野田建築会

〒278-8510 千葉県野田市山崎 2641

郵便振替 口座番号 00130-9-27644 東京理科大学野田建築会

<http://www.rikadaikenchiku.com>